

岸和田だんじり讀本

豪快さ日本一！岸和田だんじり祭りの決定版！

「だんじり」、その岸和田魂。

著者・装丁者・協力者、全て岸和田だんじり祭りの関係者。
取材12年、執筆6年を経て刊行。



版型/頁…A5並製・344頁
税込価格…2,000円

「年に一度の大祭」といわれる岸和田だんじり祭。岸和田城下の22町のだんじりが町中を大いに疾走する。見物客であふれ返り、沿道には西日本一といわれる数の屋台が並んでいる。そんな豪快なだんじり曳行に加え、ぜひ注目してほしいのが、だんじりの彫刻である。だんじり祭の主役は2つ。1つは高さ約3.8m、重さ約4トのだんじりを自慢の腕と度胸で自在に走らせる操る町衆たちで、1年がこの日のためにあり、命がけの「遣り回し」を決め、「今年もええ祭やっ」と泣く男たちである。(引用……夕刊フジ 江弘毅)

週刊朝日 ニュースな本
永井朗

大阪府和泉市でひき逃げ事件があった。容疑者の男はいちど走り去った後、現場に戻ってきて逮捕された。逃げた理由について男は、「だんじりを引けなくなると思い逃げた」と供述しているそうだ。幸い、被害者の男子中学生は、命に別状はなかったようだが、いい大人にそこまでさせるだんじりの魅力とは何なのか。

『岸和田だんじり讀本』は、岸和田だんじりの歴史と文化のすべてを網羅した恐るべき本である。「だんじり」とは山車(だし)のことで、だんじり祭は岸和田だけのものではない。本書には「神戸の東灘から和歌山にかけての大阪湾沿岸はじめ、摂河泉および紀伊・大和においては700台以上の地車があるようだ」とある。もちろん、ひき逃げ男が引きたかった和泉市にも、また岸和田だんじり祭および地車(だんじり)の起源は18世紀の初めから中ごろにかけてらしい。



だんじり祭はゆつくりと練り歩くお祭りではない。とくに近年は交差点や角をフルスピードで曲がる「遣り回し」はこのたぐいまれな祭の特徴を定めてくれている。
本書1頁 「走る岸和田だんじり」

圧倒されるのは「だんじり凶解」である。地車には細やかな彫刻がびっしりほどこされていくのだ。唐獅子や竜が踊るだけでなく、記紀神話や酒吞童子などの伝説もあれば、大坂の陣や源平合戦など歴史物もある。町内ごとに地車があり、それぞれ自慢の彫刻がなされている。中之濱町の地車には「平将門天誅の矢に最後を遂げる」彫られ、上町の地車には「川中島信玄本陣に単騎謙信踊りこむ」の彫刻である。キツチユなのだ、とてつもない迫力がある。まるで動く日光東照宮！事実、彫刻師のルーツをたどると左甚五郎伝説にも行き当たる。

しかもこの地車、江戸から明治・大正・昭和と、少しずつ変化を続け(豪華になつて)、平成になつても新調されている。四トンもの地車が猛スピードで引かれ、その勢いを緩めることなく曲がつていく(「遣り回し」)。岸和田の地車の数は二十を超えている。本読んでいただけで熱くなってくるのだから、現場はどんなにすごいことか。



絵＝殿内 博